



# 町民文芸

## 只見短歌会

令和二年七月詠草

大塚栄一

指導

夫と二人朝の新聞まわし読むその頃の事思へば遠し

馬場 八智

長年の友との交流ままならず日常茶飯コロナのニュース

関谷登美子

リウマチに手首さすりつ畑仕事出来ぬ淋しき友を羨む

渡部ゆき子

亡き姑の分身なりし杖二本背低き我にも合わせぬ短さ

目黒 富子

溜まりたる疲れに臥せばそここの片付かぬ事脳裏に浮かぶ

新国由紀子

コロナ禍で帰省のできぬ娘らに野菜送らむと籠もちて出づ

渡部ヨリ子

火の元に注意の有線放送を聞きし風の夜物書き急ぐ

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

八月定例会

宇多喜代子

指導

薫風や精検終えし峠越え  
七変化最後の色は誰が為ぞ

幸 生

荒梅雨に一瞬峡の沈みけり  
青ぐるみ池の底より青き声

恒 夫

糸取りに先祖も越えた八十里  
コロナ禍や誰にも会わず墓参り

信

新じゃがを切る俎板にひびかせて  
早朝の兄の背の見ゆ青田道

礼

ミシン掛け針目追いつつ梅雨籠る  
袋掛け斑房有りブドウ棚

都

薪積んだ隅にひっそり螢草  
雨年の清水かすかに増し出ずる

一 穂

空あおぐ今日はここまで草むしり  
カビ臭きグンスシューズの捨てがたし

味代子

嬰兒の寝返り困む夏座敷  
人参の間引きの迷い夏の夕

修 一

目癒えて友の句集を読める秋  
長電話続く猛暑とコロナ禍と

弘 子

指導者が宇多喜代子先生に変わりました。宇多先生は、現代俳句協会特別顧問、日本芸術院会員であり、昨年の秋には文化功労者として、文化勲章をお受けになりました。

